



(上) 田中先生(右)の助けを得ながら、最後まで立派に発表を行った4年1組の児童たち。2・3組の同級生たちも真剣に聞き入った
 (右) 田中先生は、4年1組の児童が絵やメッセージを書いた手作りノートをタンザニアに持って行き、地元の子どもたちに贈った
 (左) 孤児院を訪問し、日本の折り紙を紹介しながら子どもたちと交流する田中先生



私たちが伝える タンザニアのこと

JICAの教師海外研修で担任の先生がアフリカのタンザニアを訪問したのをきっかけに、人々の生活や貧困など多くのことを学んできた金沢市立大浦小学校の4年1組の児童たち。3月上旬、その成果を同級生に伝える特別授業が行われた。

異国のことを学び
自分を見つめ直す

「ジャンボ！ハバリヤッコ！」
36人の元気な声が響き渡る。3月上旬、のどかな田園風景の中に佇む、石川県金沢市郊外の市立大浦小学校の4年生の教室で、国際理解の特別授業が行われていた。前に並びスワヒリ語のあいさつを披露したのは4年1組の児童たち。今日は、担任の田中雄輝先生と一緒に勉強してきたタンザニアのことを、4年2組と3組の同級生に発表する大事な日だ。この日のために連日準備を重ねてき

た。

初めに、タンザニアの国旗、紙幣、言葉や、人々の生活、文化を紹介。パソコンのスライドを使ったり、○×クイズを取り入れたり工夫を凝らした進行に、2・3組の児童たちも真剣な表情だ。

この企画は、昨年夏、JICA北陸が行った教師海外研修※に田中先生が参加し、タンザニアを訪れたことがきっかけで実現した。「研修に参加するまでは、国際協力への関心はあるか、海外に行ったことすらなかった」と笑う田中先生。しかし、前年度の研修に参加した先輩教師の授業を通して、児童たちが世界に目を向けていく様子を見て心を動かされた。

タンザニアでは、教育環境の改善に取り組む青年海外協力隊員の活動現場を訪ねたほか、小学校でHIV/AIDS教育・性教育の授業を見学したり、エイズ予防のためのJICAの支援について学んだりした。また、折り紙や日本の歌などを紹介して孤児院の子どもたちとも交流するなど、充実した研修となった。

帰国後、田中先生から5回にわたるタンザニアについての授業を受けた4年1組の児童たち。HIV/AIDSやマラリアなど感染症のまん延や安全な水の不足といった、田中先生が感じたタンザニアの課題を学んだ。また、田中先生が撮影した、現

地の子どもたちが将来の夢を語る映像を見て、厳しい状況でも笑顔を見せない同世代の姿にさまざまな思いを巡らせた。

「初めは『かわいそう』としか受け止められなかった子たちが、授業を重ねるうちに、タンザニアの子どものたくましさや心の豊かさに気付くようになりました。異国の文化、生活、人々を知り、自分を見つめ直すきっかけになったのでは」と田中先生は振り返る。

「この経験を2・3組のみんなにも伝えたい」。先生とみんなの思いが、今回の特別授業につながった。

タンザニアの人々が 教えてくれたこと

授業の終盤、田中先生が撮った映像が流れた後、1組の児童がこう話した。

「タンザニアの平均寿命は45歳で、人々にとって『死』はとても身近です。私たちは、一日一日を大切に生きて生きる彼らから教えられることが多くあると感じました。皆さんはどう思いますか」。その問い掛けに、皆がじつと耳を傾ける。

タンザニアの学校で、子どもたちが自らが調べたことや意見を発表し、エイズの予防教育に取り組む様子を目にし、感銘を受けた田中先生。今

回の試みについて、「授業を通して得た学びを、自らの言葉で同級生に伝えることで、より深い経験になると考えたんです」と話す。授業が終わると、「タンザニアの人たちのことを一生懸命考えているのがよく分かった」「当たり前だと思っていることが、実はとても幸せなんだと気付いた」といった感想が2・3組の児童たちから寄せられた。

田中先生がタンザニアを訪問したことで、世界への大きな扉を開いた児童たち。この日の授業は、4年生全員の胸に深く刻まれたに違いない。「アサンテナーナ！」(ありがとう!)最後にそう叫んだ彼らの顔には、飛び切りの笑顔が輝いていた。

※国際理解教育・開発教育に関心のある小・中・高校、特別支援学校などの教員が、約10日間、開発途上国で地元の人々の暮らしや国際協力の現場などを視察する研修。帰国後には、研修で得た学びを子どもたちの教育に役立てることが求められている。



学校の文化祭でもタンザニアをテーマに現地の生活・文化の展示やクイズを行った



発表を終えた達成感で笑顔が弾ける。「みんなよく頑張った」と田中先生